東南アジア考古学会　2011 年度研究大会プログラム

開催日　　2011 年 11 月 26 日（土）・27 日（日）
　　26 日（土）「自由研究発表」は午後 1:00 開会（開場 12:30）
　　27 日（日）「研究大会」は午前 10:30 開会（開場 10:00）
なお 27 日は午後 1 時より 1 時間ほど、会員総会を開催いたします。

会　場　　青山学院大学（青山キャンパス）6 号館　1 階　第 4 会議室
　　東京都渋谷区渋谷 4－4－25
（JR 山手線、東急線、京王井の頭線「渋谷駅」宮益坂方面の出口より徒歩約 10 分、地下鉄「表参道駅」B1 出口より徒歩約 5 分）＊27 日（日）は入校ができるのが正門のみとなりますので、ご注意下さい。

11 月 26 日（土）自由研究発表　（発表時間は質疑応答の 10 分を含む）

12:30　開場・受付開始
13:00~13:35　山形眞理子（昭和女子大学国際文化研究所）・松村博文（札幌医科大学）
「先史東南アジアを舞台とした人類集団の移動:考古学と人類学の接点」
13:35~14:10　齋藤正憲（早稲田大学アジア研究所）
「パイワン古壺は誰がつくったのか？：規格性からのアプローチ」
14:10~14:45　鈴木朋美（早稲田大学大学院博士課程）
「ベトナム出土甕棺の分類と検討―甕棺葬文化の再考に向けて―」
14:45~15:00　休憩
15:00~15:35　田畑幸嗣（上智短期大学）
「アンコール期からポスト・アンコール期にかけての輸入陶磁器と在地陶器の諸相」
15:35~16:10　佐藤由似（奈良文化財研究所国際遺跡研究室）
「中世カンボジア墓葬遺跡の調査―クラン・コー遺跡発掘調査成果報告―」
16:10~16:45　向井　亙（金沢大学国際文化資源学研究センター）
「13～14 世紀、タイ・チャオプラヤー河流域における陶磁流通様相」
16:45　終了

2011 年 11 月 27 日(日)　東南アジア考古学会研究大会

大会テーマ「東南アジアの生活と文化 Ⅳ：嗜好品への視点　－甘味と喫煙－」
総合司会：丸山清志
10:00　　開場・受付開始
10:30~10:40　開会挨拶
10:40~11:40　**基調講演　半田昌之（たばこと塩の博物館）**
「嗜好品の文化史－人生を悦ぶ知恵の系譜－」

11:40~12:40　昼休み
12:40~13:40　会員総会
13:50~14:20　報告１　小林　克（江戸東京たてもの園）
「日本の瓦漏(がろう)研究予察－台湾・中国・オランダとの関係性を見据えて－」
14:20~14:50　報告２　荒尾美代（昭和女子大学国際文化研究所）
「ベトナムの伝統的な白砂糖生産技術―民族事例から、江戸時代の日本の技術をみる―」
14:50~15:00　休憩
15:00~15:30　報告３　江上幹幸（沖縄国際大学）
「ロンタールヤシからつくる酒とヤシ糖－東部インドネシアの民族事例から－」
15:30~16:00　報告４　田中和彦（上智大学）
「フィリピンにおけるキンマ噛みと石灰利用－考古資料と民族資料－」
16:00~16:30　報告５　石井龍太（日本学術振興会特別研究員）
「琉球諸島の喫煙－考古資料、文献資料からみた琉球喫煙文化－」
16:30~16:40　休憩
16:40~17:20　全体質疑応答と討論　　司会：坂井隆
17:20~17:30　閉会挨拶

研究報告要旨

①小林　克（江戸東京たてもの園）「日本の瓦漏(がろう)研究予察－台湾・中国・オランダとの関係性を見据えて－」

日本国内の近世における白砂糖製造の開始については、近年植村正治氏の研究等によりその実態がほぼ明らかにされつつある。製造技術や伝播の実態についても荒尾美代氏の研究等により明らかにされつつあるが、白砂糖製造技術のポイントである覆土法で用いる瓦漏については、最近ようやく考古学研究者が取り上げ始めた状況である。日本本土では、日本人が独自に開発した平底型の江戸式瓦漏が江戸遺跡や関西方面で近年多く発掘されている。一方、日本本土よりも早く砂糖作りの伝わった沖縄や奄美諸島での瓦漏の実態は未だ不明である。

最近、喜界島に伝世する瓦漏（現地では糖漏）を実見する機会があった。これは平底の江戸式瓦漏ではなく台湾の砲弾型瓦漏に類似している。ある時点で奄美諸島には台湾などから白砂糖作りの技術が伝わった可能性が考えられる。今後の中国大陸、台湾での発掘事例の増加が待たれる。

②荒尾美代（昭和女子大学国際文化研究所）「ベトナムの伝統的な白砂糖生産技術―民族事例から、江戸時代の日本の技術をみる―」

日本は江戸時代中期まで、砂糖はそのほとんどを輸入に頼っていた。ベトナムは、日本が砂糖を輸入していた国のひとつでもある。

徳川幕府８代将軍吉宗時代に、砂糖の国産化を目指した日本。砂糖生産は、サトウキビ

の苗の移植から始まり、そしてサトウキビの栽培に成功しなければならない。さらに、砂糖を作る技術の会得が必須となる。栽培・生産技術の情報を、幕府は３つのルートから集めた。

まず、黒砂糖生産に成功していた島津藩からは、浜御殿にサトウキビの植え付けを藩士に実践させた。次に、唐船の船長に栽培・製法の書付を提出させ、さらに、中国の製糖技術を記した書物を集めさせた。

この時得た中国側からの白砂糖製造技術は、「とうろ」による分蜜と、「覆土法」と称する土を活用して砂糖を白くする方法だった。

この方法は、日本に現存しておらず、また、他国でも最早行われていないとみられていたが、ベトナムでその技術が残されていた。

ベトナムの民族事例と、日本・中国の史料を中心に比較し、世界史レベルへ視野を広げて、砂糖生産技術を概観する。

③江上幹幸（沖縄国際大学）「ロンタールヤシからつくる酒とヤシ糖－東部インドネシアの民族事例から－」

東部インドネシアことに東ヌサトゥンガラ州においては、ロンタールヤシの葉や葉柄を建材（屋根材・壁材・結束材）や籠、紐として利用し、花序液からヤシ酒・ヤシ糖を生産することは、特徴的な共通する文化要素である。そのうち葉や葉柄を利用した器物としての利用法は当該地域の製塩事例で記述した。

本発表ではロンタールヤシの花序液から生産する二つの品目、嗜好品である酒と甘味･調味料であるヤシ糖の生産方法を民族学的資料から見る。酒についてはレンバタ島ラマレラ村に居住する先住農耕民の蒸留酒生産の事例、ヤシ糖についてはティモール島に居住するロテ島人が専業的に生産するヤシ糖の事例を紹介する。また、当地のロテ島人は海岸部において塩も専業的に生産しており、両生産品においてヤシを器物として利用するロンタールヤシ文化の担い手としても興味深い。ロンタールヤシの利用、特殊な炉と土器の使用法は民族考古学的資料としての重要な課題となる

④田中和彦（上智大学）「フィリピンにおけるキンマ噛みと石灰利用－考古資料と民族資料－」

「きんま噛み」（ベテル・チューイング）は、キンマの葉にビンロウジと石灰を乗せて包み、噛むことを基本とする習慣である。本発表では、フィリピンにおける「きんま噛み」に関する資料のうち、考古学的資料と民族学的資料を取り上げる。

考古学的資料としては、遺物として石灰入れとビンロウジが出土しており、遺構としては、貝の焼成遺構が検出されている。石灰入れは、フィリピン西部、パラワン島のドゥヨン洞穴の新石器時代の埋葬に副葬された貝製の石灰入れが、フィリピン最古のものである。また、ビンロウジは、ルソン島北部カガヤン州のサン・ロレンソⅠ貝塚（16～17 世紀）から出土している。一方、貝の焼成遺構も同貝塚から出土している。

一方、民族学的資料については、これまでのフィリピンにおける民族誌的調査の成果を

概観した上で、筆者とフィリピン国立博物館のガロン氏が 2011 年 8 月にラロ町、サンタ・マリア村で観察、記録した貝(カビビ)からの石灰作りについて報告する。

その上で、サン・ロレンソⅠ貝塚で検出された貝の焼成遺構が石灰作りに関連する可能性が高いことを論ずる。

⑤石井龍太（日本学術振興会特別研究員）「琉球諸島の喫煙－考古資料、文献資料からみた琉球喫煙文化－」

喫煙習俗は 17 世紀までに東アジアに到達したとされる。世界各地で特色ある喫煙具が生み出され、喫煙のあり方は多様であったことが知られている。

琉球諸島も例外ではなく、同地域に特徴的な陶製喫煙具が多種製作され使用された。発掘調査成果から、地域毎に特色ある喫煙具が存在したことが明らかになっている。その成立過程は不明な点が多いが、喫煙具の比較から東南アジア地域との近縁性も浮かび上がり、今後の調査が待たれるところである。その他、日本列島、さらに中国からも喫煙具が輸入されており、喫煙具は多様であった。

琉球喫煙文化の研究は、琉球史を読み解く一助となるばかりでなく、比較研究を通じアジア史全体にも関わる大きな手掛かりを秘めていると期待される。

東南アジア考古学会事務局
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1
上智大学アジア文化研究所丸井雅子研究室内　FAX 03-3238-3690
URL：http://www.jssaa.jp/　　E-mail: jssaa@jssaa.jp